

横浜開港150周年記念 横浜美術館開館20周年記念

大・開港展

徳川将軍家と 幕末明治の美術

2009年9/19^土～11/23^{月祝}

横浜開港150周年に当たる本年は、横浜美術館にとっても開館20周年という節目の年になります。横浜美術館では、この記念すべき年に、「大・開港展—徳川将軍家と幕末明治の美術—」を開催します。

ペリーを司令長官とするアメリカ東インド艦隊が、嘉永7/安政元(1854)年横浜に来航して日米和親条約が締結され、安政5(1858)年にはアメリカなど5カ国と結んだ修好通商条約によって横浜をはじめとする5港が開港され、日本の鎖国体制は幕を閉じました。さらに大政奉還、王政復古の号令、明治政府の成立と、わずか15年ほどで、日本は内政的にも外交的にも大きな転換をとげました。この政治的な激動は、芸術や文化にも多大な影響を及ぼしたのです。本展では、この開港にともなう政変の大きなうねりを背景にして、わが国の美術が、江戸時代から何を受け継ぎ、明治という近代国家体制の中で新たに何を生み出していったのかを明らかにします。

展示会は3章で構成されます。第1章では、封建体制下における政治・文化の頂点に君臨した徳川将軍家に焦点を当て、幕末の将軍遺愛の品々や、大奥を彩った調度品などを通して幕末の美術の粋を紹介します。第2章では、開港によって揺れ動く時代相を、史料や絵画、版画、写真などを通して明らかにします。第3章では、明治政府の文化政策のもとで制作された美術品や工芸品などを展示し、開港を経て新しく生み出された美術について考察します。

本展を通し、芸術文化におけるパトロン役割と意義、新しい美術表現の誕生とひろがり、文化政策の展開と美術の変容といった問題、さらには近代日本草創期の芸術文化の特質が、あらためて浮き彫りになるでしょう。



【展覧会の構成と出品内容】

※会期中、展示替えを予定しています。

第1章 徳川時代

1. 大御所家^{いまなり}齊と幕末の徳川將軍

大御所と呼ばれた11代將軍 家齊から、江戸幕府最後の15代將軍となった慶喜^{よしゆき}までの肖像画とゆかりの品々を紹介します。

2. 大奥の美意識

江戸城大奥の絵画を担当した御用絵師(奥絵師)によって描かれた絢爛たる屏風絵や、天璋院(篤姫)、和宮など幕末の大奥を彩った人物が愛用した調度品などを紹介します。



《岩に鷹^{たなかざり}棚^{たなかざり}鋳》家定所用
江戸時代(19世紀) 銀細工 徳川記念財団蔵



狩野晴川院^{かのうせいせんいん}養信《四季花鳥図屏風》
文政10年(1827) 紙本着色、六曲一双 円浄寺蔵



《小袖 浅葱縮緬地松竹梅桜菊網干模様友禪染織》伝和宮(静寛院宮)所用
江戸時代(19世紀) 徳川記念財団蔵



第2章 開港の時代

ペリー来航と日米和親条約、ハリス来航と日米修好通商条約など開港関係の史料、横浜浮世絵、幕末の写真などにより、開港期の激動する時代相に迫ります。



歌川(五雲亭)貞秀《横浜鈍宅之図》
文久元年(1861) 多色木版(大判錦絵三枚続) Ryu Collection



伝ペーター・B・W・ハイネ《ベルリ提督横浜上陸の図》
嘉永7/安政元年(1854)以降 油彩、カンヴァス
横浜美術館蔵



アントニオ・ベアト《遣欧使節とスフィンクス》
元治元年(1864) 鶏卵紙 横浜美術館蔵(寄贈作品)



《磁器透かし絵 Friedrich II》
プロイセン使節オイレンブルク伯爵献上
19世紀 ベルリン王立磁器製陶所(KPM)製
徳川記念財団蔵

第3章 明治時代

1. 明治政府と美術

(1) 輸出用の工芸品

まぐすやき しほやましつき
真葛焼、横浜焼、オールドノリタケ、芝山漆器、箱根の寄木細工など、欧米に輸出され高い人気を得てジャポニスム(日本趣味)を巻き起こした工芸品や、絵画、写真帳を展示します。

しばやまきつきふくじんりゆうまきはなひけ
《芝山蒔絵七福神龍巻花生》
明治時代(19世紀後半～20世紀初頭)
漆、金属、芝山細工、七宝
ドクターデヴィアス化粧品株式会社蔵



(2) 西洋画の受容

ヨーロッパに留学して、いち早く実地に油彩画を学んだ山本芳翠や五姓田義松、わが国最初の官立美術学校である工部美術学校に入学し油彩画技法を習得した小山正太郎や浅井忠、東京美術学校で教授として本格的な西洋画移植に取り組んだ黒田清輝など、明治政府と関わりの深い洋画家たちを紹介します。

(3) 帝室技芸員と博覧会

宮内省から優れた美術家として帝室技芸員に任命され、皇室のご下命品などを制作した作家を中心に、内国勸業博覧会、万国博覧会に出品した作家を紹介します。狩野芳崖、



高橋由一《美人(花魁)》
明治5年(1872) 油彩、カンヴァス
東京藝術大学蔵 重要文化財



はしもとがほう たかむらこううん いしかわこうめい かわしまじんべえ
 橋本雅邦、高村光雲、石川光明、二代川島甚兵衛、初代
みやがわこうざん なみかわやすゆき かがわかつひろ
 宮川香山、並河靖之、香川勝廣などによる、明治の日本画、
 工芸の技術の高さが見所です。



並河靖之《桜蝶図平皿》
 明治時代(19世紀) 有線七宝
 清水三年坂美術館蔵



すぎたにせつしょう
 杉谷雪樵《花鳥之図》
 明治20年代(19世紀末) 絹本着色、軸 宮内庁三の丸尚蔵館蔵

2. 明治の徳川家と美術

明治期の徳川家と美術とのかかわりを、徳川家が庇護した画家
かわむらきよお
 川村清雄の作品を中心に紹介します。あわせて、將軍を退いた
 後、趣味の世界に没頭したといわれる徳川慶喜の油彩画、写真
 作品を紹介します。



川村清雄《徳川慶喜像》
 明治時代(19世紀) 油彩、板 徳川記念財団蔵

3. 新たな美術の庇護者、横浜はらさんけいの原三溪

生糸貿易を中心とする実業で卓抜した手腕を発揮した近代横浜
しもむらかんざん いまむらしこう こぼやしこけい
 の経済人原三溪が庇護した下村観山、今村紫紅、小林古径ら
 近代日本画家たちの作品を紹介します。



下村観山《小倉山》
 1909年(明治42) 絹本着色、六曲一双 横浜美術館蔵



小林古径《極楽井》
 1912年(大正元) 絹本着色、軸
 東京国立近代美術館蔵

